



●●●
How To Choose the Clincher Tire

2013年度版 いま履くべき クリンチャータイヤセレクション

一般ユーザーにとって、クリンチャータイヤがロード用タイヤの主流となって久しい昨今。
レース派から絶大な支持を集めるチューブラーとも“もうほとんど差がない”とまで言われるようになった。
そんな2013年の“クリンチャータイヤ事情”とともに、自分に合ったモデルの選びかたを解説しよう！

PHOTO:Kenji TAKADA, Shingo NITTA TEXT:Masanori ASANO, BiCYCLE CLUB

じゃあ私はいったいどのタイヤを選ばいいの？

どんな走りをするかで選んでみよう！

- ・ヒルクライムでラクしたいなら**> **200g以下の軽量モデル**
 200gを切るタイヤは軽量と言ってもいい。もちろんチューブの重さもバカにならないので気にしたい。軽量ということは、そのぶん他の性能を犠牲にしているところがあるため、やや用途が限られる
- ・通勤・通学がメインなら**> **やや重くても耐パンク性を重視**
 パンクして会社や学校に遅刻したら大変！ ということでもっとも必要なのは耐パンク性能。軽量性は損なわれるケースが多いが、肉厚なトレッドや硬いケーシングをもつタイヤが求められる
- ・ロングライドで疲れたくない**> **乗り心地がソフトな25C以上**
 身体にかかる負担を軽減したいなら、路面からの衝撃を吸収する柔らかめのタイヤがオススメ。また太いほうが乗り味はマイルドになる。空気圧は適正の範囲内でやや低めにするのも良い
- ・レースで結果を追求するなら**> **反応がダイレクトなハードタイプ**
 タイヤの性能差で結果が大きく左右するのはヒルクライムやタイムトライアル。転がり抵抗が低く、ロスのないハードなものが好まれる。ただクッション性はやや損なわれるデメリットも

もはやレーサーもクリンチャーの時代!?

ついに完成されたクリンチャータイヤ! いまの流行は「しなやかな太めサイズ」

元祖ロードバイクタイヤと言えばチューブラー。だが時はたち、クリンチャーは技術開発により完全に主流となった。なかでも昨今は「しなやかな乗り味で、25C以上のやや太め」が流行中。そのワケとは……。

しなやかとは例えるとMTBのサスのよう

「2013年のクリンチャータイヤを語る上で、しなやかな乗り味」はキーワードになると思います。硬い（乗り心地がハードな）だけのタイヤ、柔らかい（乗り心地がソフトな）だけのタイヤを作るのであれば、メーカーは苦勞しないと思います。しなやかで転がり抵抗も低く、グリップも良く、耐久性もある、というそれぞれ相反する性能を追求して、しなやか」とは、安価なタイヤの空気圧をただ下げた状態のような「柔らかいだけ」ではなく、例えるならよくセッティングされたMTBのサスのようなものです。

そう教えてくれたのは東京都足立区のタイヤ専門店「marco」(マルコ)村上店長。近年ロングライドやツーリングを楽しむサイクリストが増えているのも、しなやかなタイヤが好まれる理由のひとつだ。

また、ツール・ド・フランスなど海外のレースを撮影するフリーカメラマンの辻啓氏によると、「レーサーは細いタイヤ」という常識が変わってきているという。「25Cなど太めのタイヤを履いているのをよく見かけます。太いタイヤを使うのは選手はもちろん、チームメカニックのこだわりでもあるようです。ちなみに先日閉幕した、ツアー・ダウニングではチューブラータイヤばかりでしたが、他のレース、とくにTTではクリンチャータイヤを使用しているチームを見かけます」と語る。しなやかな太めクリンチャータイヤが流行の最先端か!?

インプレッションチャートの見方

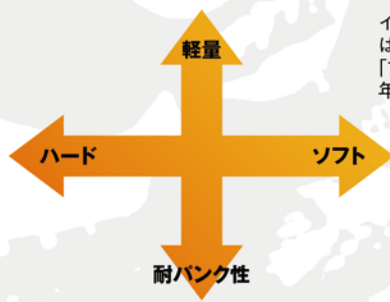
横軸は乗り心地がソフトかハードか

インプレッションは各ブランドの代表的なモデル1本について行い、そのモデルのフィーリングを浅野氏に解説してもらった。またチャートの配置はインプレッションの結果によるものではなく、メーカーの意向によるもの。縦軸は主に重量と耐パンク性能、横軸は乗り心地の方向性を示す。ただし一部のブランドは要素が異なることに注意。

インプレッションライダー 浅野真則さん
三重県在住の実業団E1クラスで走るフリーランスライダー。それぞれのインプレッションは徹底的に走りこみ、できるだけ同じ状況で行った



インプレッションバイクは浅野氏私物のスコット「アディクトR1」(2009年モデル)



チューブはお気に入りのエクステンザ/超軽量チューブ

ホイールはマヴィックのキシリウムK10を使用

ヴィットリア以外は空気圧を7.5気圧に統一



「コレを使っている理由は、市販されているチューブのなかではかなり軽いから。あと、バルブの長さも48mmと60mmとラインナップされているので、ディープリムホイールでも使えるのも魅力」

「ザ・アルミリムホイール」という感じで、まあまあ軽いうえ縦方向横方向とも剛性が高く、かなりカッコリした乗り心地です。シマノの7900シリーズなどと比べると対照的な乗り味ですね」

「ヴィットリアだけ指定が8気圧以上だったので。空気圧を高くすると走り軽くなるイメージがあるかもしれませんが、ある程度以上はそんなに変わらず、むしろグリップが落ちる気がします」

流行その1 全ての性能バランスがアップ



レース派に好まれるチューブラーと比べると、あらゆる面で見劣りしていたというクリンチャーだが、昨今は性能が飛躍的に向上したという。「ウチのお客さんも6割はクリンチャー派で、チューブラーは残り4割。やはりコストパフォーマンスはバツグンに高い」と村上店長

流行その2 トップモデルも5000円台へ!

例えばIRC/フォーミュラプロRBCCなら

7,350円

5,670円

「今は5,000円台が大きな分かれ目になっています。それ以上だと超ハイエンド、5,000円周辺は高級モデル、それ以下はミドルグレードです。最近はこのメーカーも値下げしてきましたから」と店長。消耗品でもあるのでバカにならない。ユーザーとしては嬉しい限りだ

流行その3 25Cなど太めサイズの増加



海外のプロツアーレベルですら使用率が高まっているという、「25C以上」というタイヤの太さ。空気量が多いことでクッション性が高まり、疲れにくくなる。これは重量という唯一のデメリットを無視できるほど。メーカーもラインナップを増やしているようだ

流行その4 全般的にしなやかさを重視



しなやかとは、乗り心地がソフトで振動吸収性の高いタイヤのフィーリングを指すと言う。「単に柔らかいだけというのではなく、適度に路面の状況も伝えてくれて、なおかつ加速したとき反応もよくて、転がり感が軽くなるタイヤがベストですね」と村上店長

2012年度 marco売れ筋モデル!

<クリンチャータイヤBEST5>

- 1位: パナレーサー/レースD.Eポ2
- 2位: チャレンジ/ストラダ
- 3位: コンチネンタル/グランプリ4000S
- 4位: ミシュラン/PRO4シリーズ
- 5位: パナレーサー/カテゴリーS2

<チューブBEST3>

- 1位: シュワルベ/チューブ仏式軽量タイプ
- 2位: パナレーサー/R-AIR
- 3位: ミシュラン/エアコンプウルトラライトチューブ

Info

東京唯一(?)のタイヤ専門店 足周りのことならおまかせ!

タイヤ専門店だがホイールやアクセサリも揃い、取り扱うモデルは多い。「ホイールの振れ取りなどメンテナンスも行っていきます。荒川のすぐ近くなので、サイクリングがてらにぜひ立ち寄ってください」とは店長の村上さん



左/ラインナップは豊富。右/ホイールのバランスを取る「ホイールバランサー」は1本1000円で施工



村上店長



marco自転車タイヤショップ

〒123-0864 東京都足立区鹿浜橋1-13-12-103
TEL.03-5809-5590
http://marcocycltire.donburako.com/
営/11:00~20:00 休/毎週火曜 第1第3水曜